
ワインと癒しの旅 *in* オーストリア



もわりえ



3

グラーツと

南シュタイヤーマルク ワイン街道



さあ、ヴィエナーノイシュタットの駅を出発したら、そろそろ車窓から
きれいな景色が楽しめるわよ。グログニッツっていう名前の町から、ミュ
ルツツーシュラーグの間を走る鉄道が、ゼメリング鉄道って呼ばれてい
るの。私たちが今乗っている列車は、高速列車のレイルジェットだから、グ
ログニッツの駅にはとまらないけれど、ちゃんとゼメリング鉄道と同じ
ルートを走っているのよ。あ、ほら今ちょうどグログニッツの駅を通過し
ているでしょう。緑あふれる山間の中を走るって気持ちいいわね。見渡す
限り木々の緑が広がって、後ろには山が連なっているわね。細くて高い白
樺の木も並んでいる、きれいね。さっきどこか小さな駅を通過するとき
は、低い位置に線路があったのに、今は山の上を走っているわよ。そろそ
ろまた、このゼメリング鉄道の見どころ、石造りの高架橋を渡るわね。列
車の窓からだと、ガイドブックやテレビで見るような見事な橋の光景を

目にするのは難しいけれど、でもちょっと橋が見えるのよ。

あ、ほら、あそこ！



ミュルツツーシュラーグの駅に到着ね。ここからあと1時間くらいしたらグラーツに到着するわよ。さて、しばらく窓辺に手をかけて外を見ていたから、ちょっと疲れちゃったわ。椅子の上にこの座布団を敷いてもらえるかしら？　ありがとう。私たちネコはこういうフカフカのところに座るのが好きなのよ。まずはこうしてフミフミして場所を整えて、よいしょ。くつろぎのポーズ。お日様が当たって気持ちいいわ。たまにはこうして、列車で旅をするのもいいわよね。

今景色を堪能していたこの区間、ゼメリング鉄道は世界遺産にも登録されているのよ。何がすごいって、山の中を走る鉄道はここが世界で最初だったのよ。1848年から1854年まで、6年もかけて造られたんですって。ここゼメリング峠を切り開

いて鉄道を敷いたから、たくさんのトンネルや橋が造られているのよね。こんな山間の中だから当然たくさんのカーブや急な傾斜があるじゃない。当時の最新技術を駆使して作られているそうよ。それが、現在でもまだこうして使われているっていうことがまたすごいじゃない。

今日はね、これからオーストリアの中でウィーンに次ぐ第2の都市と言われているグラーツの町を観光するわよ。えっ？ グラーツってあまり観光するところなさそうなイメージですって？ あら、残念なことに、グラーツってこんな風にあまり観光地として有名じゃないみたいだけれど、私はグラーツって、みんなもっとワクワクするような興味を持って訪れるべき町だと思うのよ。旧市街には中世の神聖ローマ帝国の皇帝、フリードリヒ3世が建てた王宮やドームがあるでしょう。そして、この町にはムーア川が流れていて、この川にある中洲もとてもユニークで面白いのよ。シュロスベルク、日本語で言うと城山にも登れて、上には大きな時計塔があって、そこからグラーツの赤茶色のレンガ屋根の景色が一望できるのよ。旧市街はね、ユネスコ世界文化遺産にも登録されているんだから。なんか私、また話しすぎちゃったけれど、とにかく、行ってみましょう。ゆっくり観光したら、今日はグラーツに泊まって、明日はいよいよまたワインの旅に出かけるわよ。グラーツが州都になっているシュタイーマルク州もまた、オーストリアのワイン生産地の一つなの。さあ、グラーツの駅に到着ね。

あら？ どこに行ったのかと思ったら、その壁に驚いていたのね。天井から壁まで、この赤と銀色の恐竜の骨みたいな模様の絵が描かれているんだから、立ち止まって見ちゃうわよね。グラーツはね、2003年に欧州文化首都に選ばれて、その時にインスブрук出身のマルチメディアアーティスト、ペーター・コーグラーによってこの駅に、この面白い絵が描かれたのよ。もともとは、この欧州文化首都の期間1年だけの予定で描かれたのだけれど、好評だったからそのまま残されているらしいわよ。

なんでも2003年から2004年の間、グラーツはオーストリアで一番きれいな駅に選ばれているんですって。確かに、こんなユニークな壁がある駅は珍しくて、どこかミュージアムにでも来たみたいなのがしていいわよね。



路面電車で町中に出ましょう。路面電車って乗ったことある？ ああ、そう、長崎で乗ったのね。ここオーストリアでは珍しくないのよ。首都のウィーンにもたくさんの路面電車が走っていて、市民の重要な交通機関のひとつなの。24時間乗車券を買おうね。

さっきちょっと話した、欧州文化首都って言うのはね、毎年EU加盟国の中から選ばれて、その1年間文化や芸術に関連した行事などがその町で開催されるのよ。ヨーロッパが一つになるには、文化的にもお互いに理解し合わなければいけないっていう発想から1985年に始まったの。アテネから始まって、はじめの頃はパリやアムステルダムなんかの大都市が選ばれていたんだけど、途中から、都市開発の意図も組まれて、小さな都市が選ばれるようになってきたそうよ。また、EUの拡大に合わせて、同じ年に複数の町が選ばれるようにもなったんですって。グラーツにも、この欧州文化首都に選ばれた時に建てられたものがいくつか残っていて、今のグラーツの町の観光スポットになっているのよ。あ、ここで降りましょう。

ここはハウプトプラッツ、中央広場よ。左側の白い立派な建物は市庁舎。町の中心にあるから町歩きの時に目印にもなるのよ。広場の噴水の中にある像は、ヨハン大公の像。1782年にハプスブルグ家の血筋を引いて生まれて、お兄さんのフランツ2世は皇帝になったのよ。ヨハン大公は子供の頃から優秀で、皇帝になったお兄さんもヨハン大公の賢さを妬んだこともあったそうよ。ヨハン大公は庶民的な人柄で、ここシュタイヤーマルク州の産業、農業、教育、文化の発展にものすごく貢献したんですって。それで、「シュタイヤーマルクの王子」って呼ばれているの。あそこにあるホテルには、ヨハン大公の名前が付けられているわよ。



ねえ、ちょっと後ろを見て。壁に立派な絵が描かれた建物があるでしょう。ドイツ語で、“絵が描かれた家”っていう意味の「ゲマールテスハウス」って呼ばれていて、「ヘアツオーグホフ」っていう名前もあるのよ。

1742年にバロックの巨匠ヨハン・マイヤーが、ギリシャやローマの神話の神様たちを描いたんですって。このフレスコ画は220平方メートルもあって、こんなに広範囲の建物のフレスコ画は、オーストリアでもここだけだって言われているのよ。

「へえ、そうなのね。馬に乗っていたり、マントを着ていたり、いろいろなストーリーがありそうね」



「ええ、そうなのって、あなたたちは？ 」

「私たちは日本からの観光客なのよ。猫ガイドさんの説明がとても詳しくてわかりやすいから、つい一緒に聞いてしまったわ。このまま一緒に観光を続けさせてもらってもいいかしら？ 」

「えっ？ 私ガイドじゃないけれど」

「あら、でも息子も猫さんの説明を一生懸命聞いていたし、あ、ほら、ご同行の方も、是非一緒に、って言うてくださっているし」

そうねえ。まあ、人数が多い方が賑やかで楽しいものね。

「じゃあ、私の案内でよければ是非」

「ありがとうございます」

えっと、じゃあ次はこっちに行きますよ。この先には王宮とドームがあるのよ。

「お母さん、王宮って王様がいらっしゃるところ？ 」

「タアくん、今はこの国には王様はいないのよ。昔、ハプスブルグ家っていう一族がこのオーストリアを治めていたのだけれど、その時に作られた建物なんじゃないかし

ら。猫ガイドさんがきっと詳しく説明してくれるわよ。あ、そうなの、猫さんの名前はランちゃんっていうんですって」

「ランちゃん、ここには王様がいたの？」

はい、私の名前はランです。えっとね、さっき君の、あ、タアくんのお母さんが言った通り、ここは昔ハプスブルク家のフリードリヒ3世が建てた王宮なのよ。彼が統治していた頃の中世15世紀、ここオーストリアは、ドイツ、スイス、ハンガリー、チェコあたり一帯と合わせて神聖ローマ帝国って言われる一つのまとまりだったの。その神聖ローマ帝国の一番偉い人が皇帝で、いわゆる王様なのよね。皇帝は7人の選帝侯と言われる諸侯、ええとつまり神聖ローマ帝国の中の領土を支配していた貴族ね、その諸侯から選ばれることになっていて、ハプスブルク家のフリードリヒ3世は、1440年に皇帝に選ばれたの。だから、ここには王様がいたのよ。



「へえ、王様に選ばれたなんて、すごい人だったんだね」

ええと、それがそういうわけでもないんだけど。話し始めたらちょっと長くなってしまうのよね。

「あら、是非聞きたいわ。ランちゃん、お願いします」

それじゃあ、重要な部分だけかいつまんで話すわね。まず、ハプスブルク家って知ってたかしら？ そう、マリアテレジアやフランツヨーゼフ、エリザベートが有名よね。そのハプスブルク家が力を持つようになったのは、この神聖ローマ皇帝に選ばれてからなんだけど、一番初めに選ばれたのはルドルフ1世、1273年のことよ。神聖ローマ帝国が始まったのは962年、ドイツのザクセン朝オットーが皇帝になってからだから、ハプスブルクが登場するのはそれから300年もあとのことよね。その300年の間には、ドイツの王朝などが皇帝に選ばれていて、その間、ローマ教皇と権力争いをしたり、他国と戦ったりと、強い王朝が皇帝に選ばれると王の野心も大きくなるわよね。そんな風にある一定の一族の権力が強大化すると、他の諸侯の権限が弱くなるじゃない。だから、諸侯は力のないのんびりしていそうな貴族を皇帝に選びたかったのよ。当時ハプスブルク家は、ここオーストリアではなくスイスの北東部に本拠地を構えていて、とても小さな貴族に過ぎなかったの。また、当時皇帝だったドイツの王朝とも親しくしていたこともあって、ハプスブルクを皇帝にしてみるか、っていう感じで選ばれたのよ。だけどね、ルドルフ1世は皇帝に即位してから、それに反発するボヘミア、今のチェコね、の諸侯と戦ってオーストリアの領土を奪ったり、さらにそのボヘミアの王朝と婚姻関係を結んだことで、結果的に当時はボヘミアが治めていたハンガリーまで領土を広げていったりしたの。だから、諸侯たちはびっくりだったわよね。もうハプスブルクを選ぶのはやめよう、っていうことになったの。そんな時、ハプスブルク家がもともといたスイスでは、ハプスブルク家に支配されることを嫌がって、独立運動を起こしていったの。それで、結局ハプスブルク家はスイスを後にして、本拠地をオーストリアへと移していったのよ。

「へえ、そうなんですか。でもここに王宮があるっていうことは、ハプスブルク家の拠点は、オーストリアに移ってからまずウィーンじゃなくてグラーツにあったっていうことなのかしら？」

いいえ、ハプスブルク家はやっぱりウィーンのあたりに本拠地を置いていたのよ。皇帝に選ばれなくなったハプスブルク家は、それでもオーストリアを治める領主として続いていくじゃない。そしてある時、兄弟で共同統治をしていたことがあったのよ。レオポルト3世とアルブレヒト3世の時ね。その時に、オーストリアを兄弟で分割統治することになって、レオポルト3世が、このグラーツを中心とするシュタイヤーマルクやケルンテン地方を受け持つことになったの。

「じゃあ、オーストリア内でも偉い人が二人いたってことなのね」

「そういうことね」

その間神聖ローマ帝国は、ドイツのヴィッテルスバッハ家やルクセンブルク家が皇帝になっていたの。そして、その頃ヨーロッパでは、東のバルカン半島で、のちのトルコになるオスマン朝が勢力を伸ばしてきていたのね。そして、ローマ教皇のいるイタリアは、オスマン朝と戦う必要があったの。そんな時に、神聖ローマ帝国の皇帝だった、ルクセンブルク家のジギスムントが亡くなったの。ジギスムントには後継ぎがいなかったから、ここで、娘婿だったハプスブルク家のアルブレヒト2世がまた約130年ぶりに皇帝に選出されたのよ。でもね、残念ながらこのアルブレヒト2世は皇帝としての戴冠式をする前に、オスマン朝との戦いに出て、ハンガリーで赤痢にかかってなくなってしまうの。そこで、ようやく出てくるのが、このグラーツの王宮を建てたフリードリヒ3世。彼はアルブレヒト2世の親戚だったの。とにかく、ただオスマン帝国から防衛する役割をオーストリアに託したいという理由から、王様に選ばれたのよね。今私、親戚だったって言ったけれど、アルブレヒト2世はウィーン側を拠点としていた一族で、フリードリヒ3世は、グラーツ側を拠点としていた一族だったの。

「ハプスブルク家の中で、ウィーン方面の一族の跡継ぎがいなかったってことなのね？」

ええと、またちょっと複雑なんだけど、ウィーン側の一族、アルプレヒト 2 世が亡くなった時点で、跡継ぎになる息子はまだお母さんのお腹の中にいたの。だから神聖ローマ皇帝にはフリードリヒ 3 世が選ばれたのね。

「ふーん、そうすると、やっぱりウィーン側の統治はもちろん、後々神聖ローマ皇帝になるのは私だ、ってもめたりはしなかったのかしら？」

ええ、もめました。フリードリヒ 3 世は、間もなく生まれたラディスラウスの後見人になるんだけど、やっぱりラディスラウスの統治領であるオーストリアの他の領土も狙っていたの。そして身内で争うわけなんだけど、なんとラディスラウスは、結婚も決まった 17 歳の時に、突然亡くなってしまったの。それで、結果的にフリードリヒ 3 世は、ウィーン側も自分の手中に収めることができたのよ。

「なんか運が良かった感じね」

そう、フリードリヒ 3 世は気が弱くて決断力に欠けるなんて言われていたけれど、この強運のおかげでオーストリアの領土を守り続けて、ちゃんと歴史上のハプスブルク家の中で、名前を覚えられてもいいくらい貢献したのよ。身内との争いの後、今度はハプスブルク家の手を離れていたハンガリーにウィーンを占領されちゃうのだけど、そのハンガリーの王様マーチャーシュもまた、ウィーンを占領下に置いた後に子供を残さずに亡くなるの。そうすると、ハンガリー側に跡継ぎがないから、またフリードリヒ 3 世がウィーンを取り戻すことができたのよ。こうして、彼は 77 歳まで長生きしたそうよ。

「へえ、やっぱり長生きすることは、大切なことですね」

フリードリヒ 3 世はね、ポルトガルのお妃様エレオノーレと結婚して、後にマキシミリアン 1 世という偉大な皇帝になる息子に恵まれたの。マキシミリアン 1 世は、ハ

プスブルク家の領土をさらにブルゴーニュ、今のベルギーね、それからミラノなど北イタリア、さらにスペインへと拡大させた、中世最後の騎士って呼ばれる人なのよ。

「それじゃあ、その時代は他国との戦争で、領土を拡大したってということ？」

フフフ、いい質問ね。ハプスブルク家はね、戦争じゃなくて、他の国の王族と結婚することでその国に領土を拡大していったのよ。マキシミリアン1世自体は、ブルゴーニュのお姫様と結婚、残念なことにそのお妃様は早くに亡くなってしまうのだけれど、その後ミラノのお姫様と再婚をしたの。そして、最初の結婚でできた息子と娘がスペインの王族と結婚して、スペインへと領土を拡大、更にはハンガリーの領土も一族の婚姻によって取りもどしたのよ。

「へえ、結婚でねえ。昔は政略結婚が当たり前の時代でしたものね。いいわねえ、結婚して他の国の領土を手に入れるなんて」

これでこの王宮を建てたフリードリヒ3世のこと、よくわかったかしら？ 当時の王宮の建物は、今ではほとんど残っていないんだけど、面白いものが残されているのよ。こっちよ。

「階段？」



そう、これは二重らせん階段って言われているの。私が右側のらせん階段から登るから、タアくんは左側の階段から登ってみて。行くわよ。ほら、ここで出会えるでしょう。また別々に登るわよ。ほら、また会えた。

「面白い！ 階段が二つあって、途中で一緒になって、また分かれて一緒になる」

この階段は、マキシミリアン1世が作ったそうよ。どうしてこういう造りにしたのかはわからないけれど、面白いわよね。この向かいのドームは、王宮用の教会として、フリードリヒ3世が建てたの。あ、そうだ、フリードリヒ3世のことでもう一つお話することがあったわ。この壁を見て。これアルファベットでAEIOUって書かれているの。この文字は、フリードリヒ3世に関係するいろいろなところに残されていて、ウィーンにある彼の棺にも書かれているのよ。「オーストリアは全世界を支配する」という意味なんじゃないかって言われているけれど、真相はわかっていないの。当時はトルコやハンガリーに狙われたりしたから、オーストリアは強いんだ、っていう願いが込められているのかもしれないわね。

「へえ、『あえいおう』ねえ。神秘的なメッセージを残すなんて、なんだかちょっと、しゃれた王様なのね」



それでは、今度はいよいよシュロスベルグ、城山へ登ります。ケーブルカーに乗りましょう。乗り場まで少し歩くわよ。

「あら、これがケーブルカー？ 斜めになっていて面白いわね」

傾斜に沿って作られているからね。一番前に乗りましょうか。さあ出発よ！

「うわあ、さっきいたところがどんどん小さくなっていく」



はい、シュロスベルグに到着。

「あら、下から見えていた時計はどこ？」

この城山、広いでしょう。時計塔はもう少し先まで歩いたところなのよ。ここは15世紀中頃に、立派な城塞として建てられたの。とても頑丈に作られていて、あのナポレオンもこの城塞を落とすことができなかったって言われているのよ。でもね、そのナポレオンに19世紀の初め、ウィーンを占領されちゃったから、グラーツもナポレオンに降伏して、城塞は取り壊されちゃったの。

「あらそうなの。じゃここは城塞跡ってことなのね」

そう、でもその時に、鐘楼と昔から街のシンボルとして慕われてきた時計塔は守りたいという市民の強い気持ちがあって、市民が買い取ったから破壊されずに済んだそうよ。

「それじゃあここは、昔から町の人に愛されていたのね」

「あ、時計だ。大きいね」

この時計塔は、塔の4方向全部に時計がつけられていることが特徴よ。えっ、そうなの、よく気がついたわね。この時計は時間を示す針が、分を示す針より長く作られているの。もともとこの時計塔が作られた時は、そんなに細かい時間を示す必要がなくて、時間を示す針だけがつけられていたの。でもその後、分を示す針もつけようってことになったのだけれど、時間の針が長すぎて、それ以上長い針を作るとおかしくなっちゃうから、短い針で分を示すようにしたんですって。なんか可愛いエピソードでしょう。



あそこから町が見渡せるわよ。

「うわー。赤茶色の煉瓦造りの屋根が綺麗に並んでいるじゃない。ステキねえ。あそこに川が流れているのね」

そう、あれはムーア川。あそこに橋が架けられていて、真ん中に何か楕円形の面白いものがあるでしょう。あれはムーアインゼルって言われる島なのよ。橋を渡ってあそこまで歩いて行けるの。中はカフェになっているの。それから、あそこ、左側にも何だか恐竜の足みたいにゴツゴツしている、灰色の面白い建物が見えるでしょう。あれはクンストハウス、ミュージアムなのよ。中ではその時々で展覧会が開かれているの。この二つの面白い建物は、2003年グラーツが欧州文化首都に選ばれた時に作られたものなの。このユニークな建物もまた、グラーツの町のシンボルになっているのよ。

「あら、後であそこに行ってみましょう」



「お母さん、この下に階段があるよ」

この階段は下までつながっているの。階段で下に降りることもできるのよ。

「ぼく、階段で降りたい！」

「ええー、大変じゃないかしら？」

260段あるそうよ。どうぞ階段でゆっくり降りてください。途中庭園もあってきれいよ。私たちはエレベーターで降りましょう。じゃあ、下でまた会いましょうね。

エレベーターはガラス張りで、さっきの傾斜状ではなく、まっすぐ降りるからあつという間よ。はい、到着。



そう、このエレベーターがあるところ、洞窟みたいなちょっと不気味な感じがするでしょう。第2次世界大戦中は防空壕として使われていたんですって。この洞窟の通りを歩いて外に出て、ちょっと歩いてから振り返ってみて。そう、この辺りね。ほら、時計塔につながる階段の景色が綺麗でしょう。あの親子は今頃どの辺りかしらね？

あら、それは嬉しいわ。グラーツは観光するところなさそうなんて言っていたのに、可愛い見所あふれた町だっていうことが分かったのね。

「はあ、お待たせ」

お疲れさま。タアくん、よくがんばったわね。

「階段が途中で右に曲がったり、左に曲がったりして、楽しかった。お花もきれいだったよ」

そうそう、ただ下までまっすぐに階段があるんじゃないくて、くねくねしているから歩いていても楽しいし、下から見てもきれいなよね。

「あの、お腹空きませんか？ 私たち遅くなっちゃったけどお昼を食べようと思って。よかったらご一緒にいかがですか？ いろいろ案内していただいたお礼に、ご馳走させてください」

あら、なんだかそれは申し訳ない気がするけれど、ちょうどお腹すいたし、休憩しましょうか。こっちに行くと、いい感じのレストランが並んでいるから行ってみましょう。

＊

では、いただきます！

「グラーツっていいところなのね。あまり見るところがないのかと思っていただけど、とても満喫だわ」

あら、ちょうどさっきもその話をしていたところなのよ。こういう小さな落ち着いた町をゆっくり歩くのっていいわよね。他にもね、ちょっと郊外に行くと、エッゲンベルク城っていうバロック様式の見事なお城があるのよ。

17世紀にハンス・ウルリヒ・フォン・エッゲンベルグ侯爵が建てたお城で、時空間をテーマにしているのが面白いの。4つの塔が四季を、12の門が12ヶ月を、365の窓が1年の日数を、24部屋の客室は24時間を表しているんですって。かなり

壮大な思惑が込められているわよね。内部の天井画には神話や聖書の登場人物が描かれて、人間のあるべき姿を語りかけていると言われているのよ。



それから見逃せないのがね、ここにはあの豊臣秀吉政権下で栄えた、大阪城を中心とする城下町の様子が描かれた屏風絵があるのよ。

「え、ここグラーツに？」

そうなの。16世紀半ばごろ、ポルトガル人が日本に渡ってからスペイン、オランダなどヨーロッパ各地の人々が日本を訪れるようになったでしょう。ここに残されている絵は、おそらく1660年から1680年頃に、このエッゲンベルグ城の領主がオランダの商人から買ったんじゃないかって言われているの。8曲の屏風絵だったものを、8枚に解体して、部屋の修復をするときに、壁に一枚ずつはめ込んで、今日まで保存されているそうよ。天下統一を果たした秀吉が治めた大阪の絵からは、大阪城は

もちろん、祭りや町人の遊び、茶室に商売の様子など、華やかに繁栄している様子が見て取れるのよ。

「あら、是非見てみたいわね」

そうよね、オススメよ。でも、私眠くなってきちゃったから、先にホテルのお部屋に入って寝ることにするわ。どうぞ3人で行ってきてちょうだい。トラムで15分くらいよ。ここはお庭も広くてとてもきれいなもの。放し飼いにされているクジャクもいるから、よろしく伝えてね。

「まあ素敵。じゃあ食べ終わったら、私たち3人で行ってきませんか。ところで、このサラダのドレッシング、おいしいわね」

それにはカボチャの種で作ったオイルがかかっているの。この辺りの名産で、こんな風にドレッシングにしてもおいしいし、アイスクリームにかけてもおいしいのよ。

「香ばしい香りがしていいわね。お土産に買って帰りましょう」



＊

「なんだか今日もご一緒させていただくことになっちゃって、本当にありがとうございます。この子もランちゃんたちのこと、すっかり気に入ってしまったんですよ」

ちょうど列車でウィーンへ移動するなら、私たちと一緒に車でワイン街道の観光をしてからウィーンへ行く方が楽しいじゃない、ねえヨーゼフさん。

「そうだね、せっかくここまで来たなら、ぜひあの景色を見てもらいたいね」

今日はね、南シュタイヤーマルクのワイン街道を走るのよ。

「私ワインは好きですけど、オーストリアのワイン、飲んだことあったかしら？」

あら、オーストリアのワイン、是非覚えてちょうだいね。グラーツが州都になっているここシュタイヤーマルク州は、大きく分けて4つあるオーストリアのワイン生産地域のひとつなの。その中でも、西部、南部、南東部の3つに分かれていて、それぞれに特徴的なワインを生み出しているのだけれど、今から行くのは南部のワイン生産地よ。斜面に広がるブドウ畑の間の、細いクネクネした道を車で走るのよ。

「それは、楽しそうね」

特に今日みたいに天気が良いと、新鮮な緑の香りが感じられて気持ちいいわよ。この南シュタイヤーマルクでは、白ワインのソーヴィニヨン・ブランが有名なの。このブドウは、フランスが原産なんだけど、19世紀末、あのグラーツの広場に像が建てられていた人、ヨハン大公がムスカート・シルヴァーナっていう名前で、このあたりにワインのこのブドウ栽培を勧めたのよ。ワインの文化まで広めていったなんて、さすがに「シュタイヤーマルクのプリンス」って言われるだけあるわよね。

「この辺りで有名なそのワイン、一体どんな味がするのかしら？」

後で実際に飲んでみるといいけれど、果物の味わいが感じられるすっきりした味よ。その他にも、白ワインのゲルバームスカテラーやヴェルスリースリング、モリヨンも栽培されているの。モリヨンっていうのはね、シャルドネのことなの。シュタイヤーマルクではモリヨンって呼ぶのよ。

「オーストリアは白ワインの方が有名なんですか？」

もちろんオーストリアでも赤ワインの生産もしているけれど、この辺りでは、白ワインのブドウの方が多く栽培されているの。ハンガリーと国境を接しているオーストリアの東部ブルゲンランドの方では、赤ワインが有名よ。

「そうなのね。オーストリアワイン、楽しみだわ」

さて、いよいよ細いクネクネ道に入るわよ。

そうでしょう、こんな細い道を運転するのは難しそうだけれど、ヨーゼフさんなら安心よ。



「お母さん、あそこに風車があったよ」

あら、タアくんよく見つけたわね。そうなの、この通りはクラポテツワインシュトラッセっていう名前で、ワインシュトラッセはワイン街道、クラポテツはスロベニアの言葉で、風車っていう意味なのよ。

「じゃあいっぱい風車があるの？」

そうね、いろんなところに立っているわよ。この木製の細い風車がカラカラと音を立てて回ること、鳥をブドウの実に近づけないようにしているそうよ。この風車は、毎年収穫の神様と言われている聖ヤコブの日、7月25日から回転させるの。この日はブドウが熟し始めたことを祝って、このシュタイヤーマルクのワイン農家の人

たちが集まるの。丘にある畑の中をハイキングしながらブドウのテイスティングをして回って、最後にこのクラポテツを回すという一大イベントが行われるんですって。

「へえ、面白いですね」

そして、収穫祭と言われる聖マーティンの日、11月11日までこのクラポテツを回し続けるの。あ、ほらあそこにもクラポテツがあるでしょう。



それじゃあここで休憩しましょう。ここはシュトラブレック・ライトナーさんのワイン農家よ。

「まあ、とてもきれいな眺め。ブドウ畑が斜面を下って広がっているわよ。さぞかし手入れが大変なんじゃないかしら」

そうなの。この辺りのワイン農家さんは、この斜面にできた畑から収穫するから、大変な技術が必要とされるのよ。さあ、あそこの階段を上がりましょう。

「こんにちは。あら、ランちゃんじゃないの。お久しぶりね」

おばさん、こんにちは。今日はちょっと大人数なの。



「賑やかでいいわね。どうぞあそこのテラス席を使ってちょうだい」

「ありがとうございます。ちょうど畑が一望できる席ね」

「まあ、お庭もとっても可愛い」

ここはね、ブッシェンシャंकって呼ばれるワイン農家さん直営の飲食店、ワイン居酒屋みたいなところなのよ。ホイリゲと違って、食事は冷たい食べ物だけ扱っているの。ハムやチーズの盛り合わせやパンをオーダーするわね。飲み物は、タアくんとヨーゼフさんはお酒が飲めないから、ブドウジュースよね。それから、私たちは何にする？

「さっき、ランちゃんが話してくれたワインがいいわ」

ソーヴィニヨン・ブランね。あなたも？　じゃあ私も。

「では、南シュタイヤーマルクのワイン街道の旅を祝して、乾杯！　」

「あら、なんだかフルーツのようないい香り。そしてすっきりした喉越しでとってもおいしいわ」

果実味のいい香りがするけれど、甘さ控えめで爽やかな味よね。

「お母さん、このブドウジュースおいしい」

「タアくん、見て、このブドウジュースはあそこのブドウの木から採れるブドウで作られるのよ」

「ブドウの木、いっぱいきれいに並んでいるね」

森や林のように緑の木々が大きくたくさん茂っているのとは違って、こうやってきれいに整えられている緑のぶどう畑の景色もまた、癒されるわね。



「あら、これはなんですか？」

あ、これはね、牛肉をゼリーで包んだものなの。こういうブッシュェンシャンクではよくあるメニューよ。最初はちょっと驚くかもしれないけれど、食べてみて。

「では、いただきます。あら、冷たくて柔らかくておいしいのね。ワインに合うわ」

そうでしょう。今日みたいに暑い日は、外のテラスに座って、おいしいおつまみと一緒においしいワインを飲むのが最高よね。あ、ヨーゼフさん、ごめんなさい。

「いいよ、ランちゃん、気にしないで。下でワインを買って帰って、家でゆっくり飲むから」

「あら、ここではワインも買えるんですか？」

そうなの。食べ終わったら下のワインセラーにも行ってみましょう。

「地元の人たちがこうやって気軽に集まって、ぶどう畑の景色を眺めながら、みんなで楽しくお酒を飲むなんて、素敵な文化ですね」

あら？ タアくんたち、お庭で何か見つけたみたいよ。

何を見ているの？ あら、可愛い小人の像ね。

「こっちの小人さんは、お花が入った鉢を支えて、一生懸命働いているよ」



本当ね。でもこっちの小人さんは、椅子の上で寝転んでいるわね。タアくんはどっちの小人さんがいい？

「ぼくはこっちの小人さんのように、一生懸命働くんだ」

あら、タアくんはえらいわね。私はこっちの小人さんみたいにダラダラ寝転がりたいわ。だって、私、ネコですもの。

「あ、おばさん。みんな下のワインセラーも見たいって言っているので、お邪魔してもいいですか？」

「もちろんよ。下には息子がいるはずよ」

あら、タアくんみたいに働き者の息子さんがいるみたいね。

ワインの瓶がいっぱい並んでいるでしょう。

「たくさんあって、どれがいいのかわからないけれど、上でいただいたワインを買って帰りたいわ」

それじゃあ、これね。私もソーヴィニヨン・ブランを買おうっと。あなたも買う？

さて、では再び出発。このままこの細い道を少し走りますよ。



「ぶどう畑が広がっているかと思うと、今度は山の中の木々も広がって、そしてまたぶどう畑が現れて。見ていて飽きないわね。ゆっくりこんなところをハイキングするのも気持ちよさそうですね」

そうなの、この辺にはハイキングコースも充実しているのよ。私もまだここでハイキングをしたことはないんだけど、ゆっくり緑の中を歩いて、ワインを飲みながら休憩して、なんて楽しそうよね。

「あんな風に看板が出ているのは、ワイン農家さんを示しているんですか？」

そうよ。この辺りにはとにかくたくさんのワイン農家があるの。ウィーンのスーパーマーケットのワインコーナーでも売られているような、有名なワイン農家さんもあるのよ。スコフやサバティなんかが有名ね。小さなペンションのように宿泊施設も一緒に営んでいる農家さんもあるのよ。ワイン農家の部屋に泊まって、ハイキングを楽しんで、夜はワインと一緒においしい食事をする、っていう休暇も憧れるわね。

そろそろ見えてくるかしら。この辺りはね、スロベニアとの国境なの。ほら、道路にSLOって書いてあって矢印があるでしょう。SLOはスロベニアのことだから、こっちはもうスロベニアってということよ。

「ちょっと車停めようか？」



ヨーゼフさん、ありがとう。じゃあちょっと車から降りて見てみましょう。

「本当、スロってかいてあるわ。こんなところに国境があるなんて、日本では考えられないことよね。国境で記念写真撮りましょう」

さて、そろそろ2回目の休憩をしましょうか。ここはゲオルギベルクっていう名前のワイン農家よ。この谷の下に降りていくわよ。そう、まるで畑の中へ車で行ってみたいでしょう。

「あ、あそこにアルパカさんがいた」

「えっ？　こんなところに？」

あれはラマなの。タアくんよく見えたわね。ここではラマも飼っているのよ。さて、じゃあ車から降りて、中に入りましょう。

「もしかして、ラン？」



「シュヴィー、久しぶりね。元気だった？」

「ええ、私は元気よ。ここは爽やかな緑の草の香りと一緒に、バラやラベンダーの甘い香りまで楽しめるんだもの、いつでも元気に歩き回ってるわ」

「そうよね、羨ましいわ。今日は大人数なのよ」

「中は広いから大丈夫よ。ゆっくりしてね」

「ありがとう」

あの黒ネコさんはシュヴィーっていう名前で、ここに住んでいるの。ここは2013年に改築されて、ワインセラーは2階建てに広げられて、この庭園や中のショップ、ビストロも新しく整えられたのよ。庭園、広くてとてもステキでしょう。シュヴィーはお花が大好きだから、ここをとても気に入っているんですって。

「本当に広くて素晴らしいお庭ね。池もあって、なんだかロマンチックだわ。私もシュヴィーさんと一緒にここに住みたいわ」



さあ、中に入りましょう。ここがお店。ワインも買えるし、昨日ちょっと話したかぼちゃの種オイルもあるわよ。このゲオルギベルクでは、シュタイヤーマルクでは珍しく、赤ワインにも力を入れているのよ。

「こんにちは。赤ワイン、試飲しますか？」

「ありがとうございます。じゃあ、ちょっとだけ」

「はい、こちらツヴァイゲルトです」

「いただきます。あら、コクがあって、でもなんだかすっきりしていておいしい」

オーストリアで赤ワインのブドウと言えば、このツヴァイゲルトが一番多く栽培されているのよ。軽すぎず、でももたれない感じがいいでしょう。私もここにきたら、やっぱりこのツヴァイゲルトを買って帰るのよ。

「そうね、じゃあ私もさっき白ワインを買ったから、今度は赤にするわ。それからかぼちゃの種オイルもね」

あなたもツヴァイゲルトを買うのね。前回バッハウ渓谷では、白ワインばかりだったものね。

あっちのビストロで、ちょっと休憩しましょう。

「あら、ここのテラス席からお庭が見渡せて、気持ちいいわね。そして、このウッドデッキがまたステキだわ」

タアくん、かぼちゃの種オイルがかかったアイスクリーム食べる？

「うん、食べる！」

「あら、いいわね、タアくん。じゃあ、お母さんはワインを飲もうかしら」

そうよね、最後にやっぱりワインで乾杯しましょう。私はモリヨンにしようかな。あなたはゲルバームスカテラーにするのね。

「私はやっぱりソーヴィニヨン・ブランにするわ」

「では、私はコーヒーとアイスクリームにするよ」



「はい、こちらがアイスクリームですよ、どうぞ」

「わーい、いただきます」

「あら、ここにかかっているのがかぼちゃの種のオイルなのね。タアくん、一口お母さんにちょうだいね。あら、オイルなのに甘くないからしつこく感じない。アイスクリームに合うのね」



今回は賑やかな旅になって、楽しかったわ。

「グラーツの中央広場でランちゃんたちに会えて、本当によかったです。たくさん案内していただいて、本当にありがとうございました。新しい出会いがあるのもまた、旅の楽しみの一つですね」

本当にそうね。グラーツの観光も、ワイン街道もとても満喫できた？ それはよかったわ。今回もまたワインを買えたものね。オーストリアのワイン、どんどん好きになってきた？ フフフ。まだまだおいしいワイン、あるのよ。また一緒に飲みに行きましょう。

フワー、ハッハ。

「おや、ランちゃんそろそろ眠くなってきたみたいだね。観光ガイドお疲れ様でした。また車の中で、ウィーンまでゆっくりおやすみ」